

## 凡例

- 一、この報告書は、奈良文化財研究所史料第六十九冊にあたる。
- 一、『平城京漆紙文書』は、平城宮跡及び平城京跡から出土した漆紙文書を対象として収録するものであり、本書はその第一冊目となる。
- 一、平城京跡右京八条一坊十四坪の漆紙文書は、大和郡山市教育委員会が担当した発掘調査において出土した資料であるが、奈良国立文化財研究所が実施した発掘調査と一連の調査の遺物であり、合わせて掲載することとした。掲載を許された大和郡山市教育委員会及び担当の服部伊久男氏・山川均氏に対し、深甚の謝意を表する。
- 一、既刊行の報告書・紀要などに収録した資料もあり、釈文などがそれらと異なる場合もあるが、今後は本報告書によられたい。
- 一、漆紙文書の排列は、奈良（国立）文化財研究所による調査回数順とすることを原則とした。同じ回数内では遺構ごとに分け、おおむね判明する内容が多い順に排列した。
- 一、漆紙文書の番号は『平城京漆紙文書』における通し番号とした。本報告書には一から五六までを収録した。既刊の報告書・紀要などの番号との対照は、巻末の「漆紙文書番号・図版プレート・旧報告番号対照表」を参照されたい。
- 一、同一文書の断片と推定できる場合でも、直接接続することが確認できないものは別の番号を付した。従って、本書中における「点数」は文書数を示すとは限らない。

一、一点、一画の墨付きしか持たない断簡はかえって煩瑣にわたるので、特筆すべき点がある場合を除き、原則として収録しないこととした。また、墨痕のない漆容器蓋紙については収録しなかったが、参考のために総説に記述したものがあ

- 一、この報告書は「図版」と「解説」からなる。
- 一、図版には、解説で取り上げた漆紙文書全点について、可視光線による写真を原則として原寸大で掲載した。そのほか、資料の状態により赤外線デジタルカメラまたは赤外線ビデオカメラにより撮影した画像を加えた。赤外線デジタルカメラによる画像は、CCDを使用したデジタルカメラの赤外線域カットフィルタを外し、可視光線カットフィルタを装着した機材で撮影したものである。赤外線ビデオカメラによる画像は、赤外線リフレクトグラフィ用カメラシステムで撮影した画像をデジタルデータとして記録したものである。画像情報の保存のために、いずれも、図版にはデジタルデータをフィルムレコーダによりネガフィルムとしたものから焼き付けた写真を使用した。これも原寸大とすることを原則とするが、赤外線ビデオカメラによる画像については厳密ではない。印刷方法は、可視光線写真については三〇〇線ダブルトーン、赤外線デジタルカメラ及びビデオカメラによる画像については三〇〇線シングルトーンを用いた。
- 一、各資料について、可視光線による表裏両面の写真を左右に配し、その直下に赤外線デジタルカメラまたは赤外線ビデオカメラによる画像を配した。赤外線画像は、文字のない面については省略した。
- 一、キャプション中、「赤外線D・C」とあるものは赤外線デジタルカメラによる画像、「赤外線V・C」とあるものは赤外線ビデオカメラによる画像を示す。
- 一、キャプション中、「裏焼」とあるものは、文字の書いてある面と反対の面から撮影した画像を表裏反転させたものである。



一、本報告書の作成には、部長岡村道雄の指導のもとに、平城宮跡発掘調査部史料調査室があたった。漆紙文書の観察・積読には、渡辺晃宏・馬場基・山本崇・古尾谷知浩（現名古屋大学、奈良文化財研究所調査員）があたり、積読にあたっては文化遺産研究部の綾村宏・吉川聡、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の市大樹・竹内亮の協力を得た。また、狩野久（元岡山大学）・故鬼頭清明（元東洋大学）・加藤優（現徳島文理大学）・今泉隆雄（現東北大学）・佐藤信（現東京大学）・清田善樹（現岐阜教育大学）・舘野和己（現奈良女子大学）・寺崎保広（現奈良大学）・橋本義則（現山口大学）・森公章（現東洋大学）・山下信一郎（現文化庁）も当時参画した。資料整理及び作成全般にあたっては、小池綾子氏の尽力があり、編集・校正には、鷺森浩幸・梅本有貴江・芝華恵・杉本敬子・中岡泰子・服部源憲・松本大輔・南島真理子・山下典子氏の助力を得た。写真撮影は牛嶋茂・中村一郎・佃幹雄（当時）が行い、赤外線ビデオカメラによる画像のデジタルデータの取り込みには古尾谷・小池があたった。現像・焼付けには、杉本和樹・鎌倉綾両氏が協力した。本書の編集は渡辺・古尾谷が担当し、総説第三章は古尾谷が執筆した。